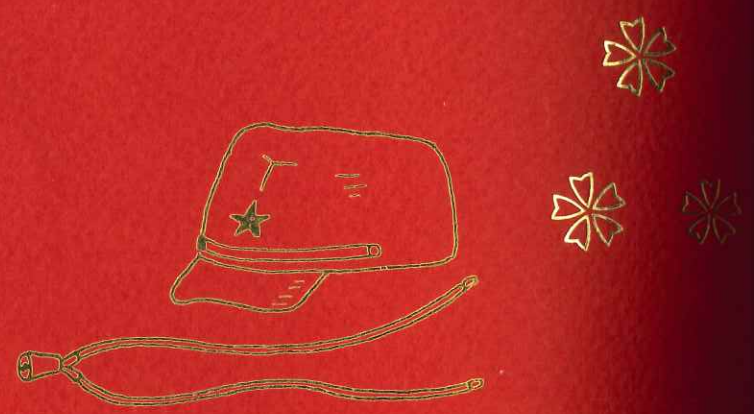


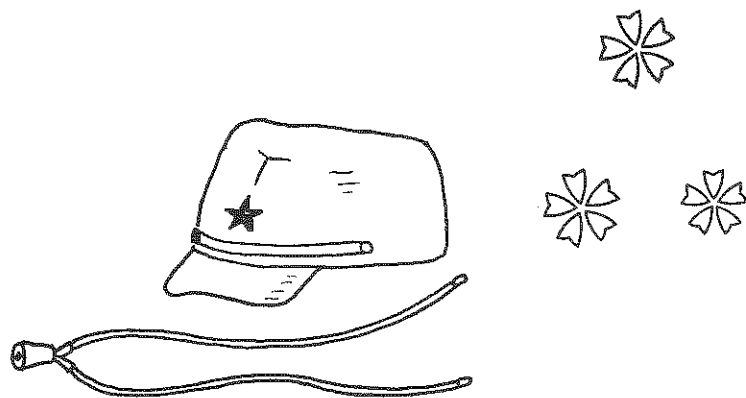
ビルマ戦線従軍記

—兵站病院勤務—



ビルマ戦線従軍記

—兵站病院勤務—





著者少尉任官



シュエー、ダゴン・パコダ

悪夢のようなあの戦争から帰って、はや二十五年になる。戦争中父を失い、七年前また母を亡くした僕は、還暦を過ぎ、妻も還暦を迎えた。僕の留守中の母や妻の苦勞を聞き、さぞ大変であつたらうと想像もし、よくやってくれたと、感謝もしている。

本年は丁度父の二十七年忌、母の七年忌に当たる。

また、ビルマで苦勞を共にした同僚も、すでに数名他界された。

この手記は読みにくく、面白くもないかも知れない。しかし、僕の生涯の悪夢の記録として、またビルマ戦線で戦死あるいは戦病死された方々の冥福を祈りつつ、思い出をたどって書きつづったものである。今後悲惨な戦争がなくなり、平和が、永久の世界平和が、一日も早くくることを祈ってやまない。

昭和四十六年建国の日に

佐々正達

はじめに



空襲 / 防空壕へ退避



通称ビル看(ビルマ看護婦)



立軍司令官チャンドラポー
著者の病室を見舞う(ラング
兵站病院にて、右端著者)



外科的アマーバー赤痢病棟
(中央著者)

地獄のビルマへ

昭和十七年八月二十五日、シチズン時計工場の工員の瘰疽（ひょうそう）の手術をしているとき、家内が赤紙（召集令状）を持ってきた。別に驚きはしなかった。なぜなら、同僚が次々と召集されているのに、僕にだけはまだこなかったもので、多分名簿の隅の方に名前が載っていて気が付かないのだらうなどと常々思っていたし、話もしていたから。そして、そのうちに必ずくると覚悟をしていたから。

二日後の八月二十七日、近所近隣の人に送られ、出征兵士の誰もがするように、田無神社に参拝し、一路熊本陸軍病院へと向かった。四月から始めた病院建築が、八月三十日に上棟式なのでちょっと気になったが、父もいることだし、何とかなるだらうと安心はしていた。この日から終戦後帰還するまで、まる三年間の、悪夢の従軍生活が始まったのである。

汽車が山陽にかかると、台風がきて、広島の手前で不通となった。いつ修復するか判らないという。八月三十日の午前中に入隊しなければならぬので、やむなくハイヤーを頼み、中国山脈を横断、浜田に出て、山陰線回りで何とか時間までに入隊した。

見習士官として一週間ばかりブラブラしていると外泊の許可が出た。どこか行って行く所もないので、熊本本山南御殿跡の指田静夫氏（母登志の父勢内の弟次郎の次男）を訪ね宿泊した。同家では赤

飯を炊き、国旗を掲げて門出を祝ってくれた。病院に帰ると数日おきに予防注射をし、その間しばしば外泊を許された。そのたびに指田家の世話になったが、叔父はいつも国旗を立て、赤飯を炊き、時には八代からアユを買ってきて祝ってくれ、大変迷惑をかけてしまった。

十月十二日、いよいよ出発。召集された我々十二名は、ビルマに行くというので、みな溜息をついてがっかり。当時は「ジャワの極楽、ビルマの地獄」といわれていた。門司で能登丸（八千トンぐらい）に乗船、出帆後玄界灘の船酔いで全然食事がとれない。途中台南に寄ったので、ここでバナナ、パイアなどを数カゴ買い込む。この果物のおかげで、同僚達も随分助かった。

台南出港の際、日の丸の小旗を振って送ってくれたあの南海の、空のきれいな海岸の情景が、今でもなお脳裡にありありと浮かぶ。

この能登丸はフィリピン、スラバヤ、ジャワ、あるいはビルマに行く兵隊、軍属で超満員。甲板上の仮設便所の汚ないのと、顔を洗う水も、手を洗う水もないのは泣かされた。船はいつも対潜警戒をとっていた。一発ドカンとくればお陀仏だ。

サイゴンからラングーンへ

十月十八日無事サイゴンに着く。ここで輸送指揮官の老少佐が下船したので、船には見習士官の我々より階級の上の者がいなくなつた。

退屈まぎれに外出しようと思いが一致、衛門で歩哨に話すと「結

構です」という。衛門を出るには出たが、現地の貨幣が一銭もない。何とかなるだろうということで、ブラブラ歩いていると、日赤の看護婦に会う。「陸軍病院はないか」と聞くと、ショロンという所にあると行って五十ペアストルくれた。これで電車に乗り、陸軍病院に行く。院内をあちらこちら見学していると、後藤君（阪大出身）の同級生に会う。これからビルマだというと「ご苦労さん」と再びサイゴンに引き返して、すしを馳走してくれた。

サイゴンの街には、至るところフランスのドゴールのポスターが張られていた。道路の上に真っ赤な痰が吐きすててあるのには、全く気が悪かった。結核の血痰かな、と疑っていたが、後でビルマに行ってから、それは現地人が口中清涼剤（ビルマではキンマとい、日本の野バラの葉のようなものに、石灰や檳榔樹の実などを混ぜて包んだもの）を噛んで吐き出したツバであることが判った。

その夜サイゴンを出帆、シンガポール（当時、昭南島と呼んでいた）に着く。

シンガポールでは牟田口兵団が奮戦したブキテマ戦の地を見る。ここを出て印度洋に向かう。このころから時々スコールが襲い、水欠乏の折柄爽快となる。また行く手にもすごい稲妻を見る。

稲妻の太きを含めて印度洋

日に夜をついで、対潜警戒をしながらイラワヂ河を遡り、目的地のラングーンの埠頭に着いたのが十月二十二日、日本を出てから十日目である。友軍の爆撃のためか、敵のそのためか判らぬが、埠頭は惨憺たるものである。上陸すると「ミミズ」ののたくったようなビルマ文字の商店の看板に、本当に異国にきた感を深くする。夕刻第六兵站病院にはいった。

街はコンクリートの立派な道路だが、牛の群がゆうゆうと潤歩しているのには驚く。右側に有名なシェエダゴン・パゴダを見る。街行く人はエンジーという短い上衣を着、腰にはロンジーという腰巻のような布を巻いている。赤い色ほど上流だそうだ。たいていの人がハダシで、生活のよい人は皮革製のサンダルを履いている。また赤褐色の衣をまとったお坊さんも随分見受けられた。

兵站病院は、ラングーン大学を接収したもので、庭に沢山のホタルが飛んでいて夜景はまことに美しい。

お茶はセイロン茶？ 悪い紅茶のようであまくない。部屋にはヤモリ（守宮）があつちの壁、こつちの壁にへばりついている。戸外ではトッケイと呼ぶ爬虫類のたぐいが「トッケイ、トッケイ」と奇妙な声で鳴き、うすら気が悪い。なお、この第六兵站病院は、シンガポール攻略にも参加し、そこで病院を接収して兵站病院にしたそうだが、兵隊はよい保革油があるといつてチーズを靴に塗り、チョコレートがあつたといつて喰べたら、それが下剤を食べよくしたもので、みな下痢をしたとか、「お上り」さんのエピソードが相当あつたという。

翌日から第二病棟（将校と地方人）勤務を命ぜられた。ここは中間少尉（鹿児島出身）が主任で、今給黎（いまぎれい）見習士官（東京医専卒）が耳鼻科を担当していた。ここで、僕が軍医予備員当時久留米の陸軍病院で一緒だった病棟看護婦・内川富美子君にバツタリ会ってびっくりした。

毎夜のように敵爆撃機が侵入、その度に友軍機が追撃し、これを撃退したり、撃墜したりした。追撃してパッパッと曳光弾が飛び、敵機が火ダルマとなって落ちて行くのは、小気味のよいもので、屋

根にのぼって拍手喝采をしたものだ。しかし、敵機がくると、あつちでもこつちでも狼火のように、合図の火が上るのは嫌なものだ。終戦近くなると、ラングーンの空は、敵機の蹂躞にまかせられるようになってしまったが……。

昭和十七年十一月中旬、我々十二名の半数がラジオに転属を命ぜられた。

アキヤブに分院開設

十八年一月初旬、アキヤブに分院を開設することになり、その開設命令が、祈峇院（きとういん）少尉と僕に出た。やれやれ戦死か、とその夜は痛飲し、サイダーびんにガソリンを詰めて、一晩中宿舎の廊下に投げつけた。パッと火花が出て爆発するので憤憤が晴れた。いまから考えると、いわゆる「火炎びん」である。何のことはない、終戦間近にはこれを戦車にぶっつけ、戦後は全学連などの武器となったのだから。

軍隊の命令はそれこそ出しつ放し。アキヤブに分院をつくれとはいうものの、そのアキヤブが、どの辺にあるのか、どうして行くのか、誰も教えてくれない。何とかなるさ、と下士官二名、当番兵二名をつれて停車場に行き、駅員から道順を聞いて出発した。無鉄砲な話である。

とにかく、ビルマの平野を横切り、最終駅のブROOMに到着した。この駅の付近は、爆弾に枯れ果てた大木が林立し、それに小ネコほどのコウモリが鈴生りにぶらさがっていた。しかし、私達の旅

はここで終わったわけではない。めざすアキヤブは、ここからさらに名にし負う険阻なアラカン山脈を越えて行かなくてはならなかったのである。その日は兵站に一泊、アラカン越えのトラックに便乗を依頼する。

「工兵隊の手で立派な道路ができていますから」といわれて出発したが、真っ赤なウソ。自動車のすれ違いもできない箇所が無数にあるし、日光の七曲りどころでないへアピンカーブが随所にあるという難路。遙かな千尋の谷には、墜落した自動車の残骸が、あちこちに転がっていた。飼育した象にはあつたが、野象にはあわなかった。クジャクもいるといわれたが、野鶏のみでそれも見なかった。夜間馬がトラにさらわれたという話はしばしば聞かされた。

やつとアラカンを越え、ターンカップに着く。アキヤブはもうすぐである。

ここから今度は大発に乗り、ハンター湾を横切つてクリークにはいった。このクリークには夜光虫が多く、舟跡がキラキラ光るので、敵機に発見されはしないかと内心ヒヤヒヤした。これを無事に通り抜けたところがアキヤブだった。

ここはすでに第一線で、着く早々「ドカーン、ドカーン」という砲声が聞こえた。それが次第に遠のいて行く。この遠のいて行くのが、日本軍の勝ち進んでいることだった。「やれやれ」と胸をなでおろしてホッとしたものである。

ここで野戦病院と交代して、分院を開設したが、昭和十八年の一月中旬だったと思う。出征してから五カ月の歳月が流れていた。

このころ、カラダン河の上空で、よく空中戦を見た。「やあ落ちた、落ちた」と手をたたいて喜ぶと、翼に日の丸がついていて、が

っかりしたこともある。落下傘で下り、そのまま見えなくなったのも見た。

手術室に直撃弾

この年の四月、マラリアにかかる。体がぞくぞくして軽い頭痛があるので、念のために血液検査をすると、検査室の下士官が飛んできた。

「軍医殿大変です。軍医殿の赤血球は全部マラリア原虫にやられています。すぐ休んで下さい」

マラリアは熱帯熱だったが、高熱の出なかったのは、体が丈夫だったからだろう。キニーネ、アクリナミンなどを飲んだり、熱が出ると、バグノンの注射をうち二カ月余で治り、六月から勤務について。この間負傷者が続々入院する。

第五五師団の藤井軍曹は、左臀部機関砲貫通破片創ではないってきた。直腸がやられて、腎部の創からは大便が出っ放しなので、人工肛門を作った。創は日毎によくなり、歩けるようになったので、飛行機でラングーンへ後送、その後は、シンガポール、台湾、内地と継送され、最後に東京第一陸軍病院に収容された。

たまたま病室付軍医が、僕の高校時代の親友、久保良知君（東京大学医学部産婦人科）だったため、佐々が第一線で手術した患者、というので良く面倒をみてくれた。そのかいがあって創も治り、人工肛門をふさぐ手術もうまくゆき元気になった。ところが、除隊準備のため、体力作りに防空壕掘りなどの作業中カゼを引いたのが

もとで肺炎になり、ポックリ死んでしまった。このことを、久保君から終戦後聞かされたが、気の毒でもあり、人の一生には計り知れないものがあるとしみじみ考えさせられた。

八月上旬からまた発熱した。今度は熱帯熱と三日熱の混合である。内服やら注射で、八月二十四日ごろ解熱した。その四日後の八月二十八日、突如敵機が分院を爆撃してきた。

午後一時、第一回の爆撃。僕は注射で痛い尻を押えながら防空壕に避難した。その直後僕達の将校宿舎は一発でふっ飛ばされた。驚いたことに、たった一枚、家族の写真が、とんでもないところに無傷でへばりついていた。

爆撃は二回、三回、四回と執拗に繰り返され、第一回の爆撃で負傷者が二十数名も出た。井上少尉は、その患者を治療室に運んで帰ってきた。そのあと第二回の爆撃で、前記のとうり将校宿舎をはじめ手術室と治療室が直撃弾をうけたわけだが、患者は全部やられてしまった。

間一髪で助かった井上少尉も運がいいが、僕も熱が下がらず宿舎に寝ていたら、直撃弾でやられたらうし、元気で負傷者の手当てをしていたら、手術室でふっ飛んでしまったらう。僕は「マラリアで死にそこない、マラリアで助かった」ともいえる。さきの藤井軍曹のような人もあるし、人間の運命はまったく判らない。

ジャンゲルの中に病院

我々（分院長・鈴木大尉）は、このアキャブが甚だ危険と察し、その夜患者を連れて、約四キロ後方の部落に退避した。このとき下痢が激しく、薬をいくら飲んでも治らない。ええままと、何でも食べたらず、治ってしまった。ここに約七日間おり、次にクリークを下り、ミンビアというところの、小山の麓のジャンゲル内に病院を開設した。

ここでは日曜ごとに住民宣撫工作で、繻帯材料や薬品などを持って部落々々を訪問して、ビルマ人に医療を施した。現地人から随分感謝され、僕の行く日には朝からモミを搗いて白米にし、ビルマ料理を作ってくれた。「マスター、今日はあなたはラッキーだ。イノシンがとれたから料理したので食べてくれ」とか「沢山食べてくれだからこの象牙を持って行ってくれ」とか、またあるときは苦力に担がせて、一メートル以上もあるバナナの房を持って来てくれたりした。

ビルマは米の産地で、どこへ行っても米はある。この米から造ったドロクのような酒は、どんなアラカンの山中に行っても入手出来る。その他、酒としては水椰子の実から造ったものもあるが、これは少しすっぱい。米は二十畝位の納屋に一杯になるような大きなカゴがあり、モミで貯蔵される。搗きたての米は内地米に劣らないが、いわゆる外米として日本へくる米は、年数のたった、しかも防腐剤を使って格納されたものだといわれる。娘さんがどっかか腰を

おろし、前方の石の臼にモミを入れ、杵のついた板の手前を踏んでシーソーよろしく気長に米を搗いているのも長閑な風景である。脱穀は庭に稲を並べ、中心に棒を立てて、その棒に牛を綱でつなぎ、牛に円を画くようにまわらせて踏ませる。牛の糞も一緒になってしまふのではないかと、不潔な感じがする。

ビルマ人は箸（はし）を使うことをいやがる。箸は中国人が使うからだそう。だから手で食べるか、スプーンを使う。手で食べるには、右手を使う。左手は不浄のときに使うからだそう。そして親指と人差し指、中指でつまむようにして形をつくり、親指の先で口の中へ放り込むように食べる。米はたたくとき途中で一回ネバを捨ててしまふので、バラバラしていて指につかない。また暑いところなのでカレーライスではないが、相当に香辛類を使う。山岳地帯に行くほど辛いようだ。水牛はこの沼地に行っても見られる。あるとき經理の中山軍曹と、食糧の買い出しに出かけ、まるまる太った子牛がいるので、あれを売ってくれ、といったら、あれは水牛の子だから食べられない、といわれ大笑いした。

父死亡の報に接す

十八年十月に本院復帰の命令が出た。再びアラカン山脈を越えてラングーンに帰った。ビルマでは、二月がいちばん草木の萌え出るころで、ペーパーフラワ、火焰木や通称「ビルマ桜」といわれる花が咲き乱れる。

もとの古巣の第二病棟勤務となり、変哲もない日々を送る。しか

し敵機の爆撃はときどきあるので、手術は敵機のこない時間を見ながらやってやり。敵機のくるのはおおよそきまっていた。敵機がくれば患者を誘導して防空壕に避難した。一度などは空襲警報もないのに物凄いな音がしたので、びっくりして飛び出すと、B29三機が火ダルマになり、数個の落下傘がフワフワ落ちてくるのが見えた。後で聞いた話だが、高射砲弾がB29搭載の爆弾に直接当たったため爆発し、編隊を作っていた他の二機もそのそばえをくって爆発、一弾よく三機を撃墜したとのことだった。

第二病棟は以前と同じく、将校と地方人を主とした病棟だったので、中部配電、ビルマ新聞(読売系)の人達と知り合った。ときどき看護婦達とご馳走に呼ばれたりもした。また将校の患者中には貨物搬勤務あり、通信隊勤務ありで、通信隊の真崎大尉(現福岡通産局産業課勤務)は、僕が所用で外出するときは、電話一本で自動車を出してくれた。もつともこの自動車はビルマ新聞の石神君から僕がもらって彼に預けたものだが。貨物廠の将校からは、ブランドー、ウィスキー、煙草の寄贈があり、なかなか豪勢だった。

昭和十九年二月父死亡の報を、大谷與四郎氏(当時田無町収入役)から受け取った。家はどうなっているだろうか？ 家族は？ 病院は？ 帰心矢の如しだ。

十九年四月、少尉に任官し、第二病棟主任となった。もつと前に任官していたのだが、外地のため通知がずっと遅れたのだ。服もない。見習士官の服に少尉の肩章をつける仕末だ。

四月中旬、ビルマ新聞写真班の跡部忠次君が、前線に出勤を命ぜられた。その前夜僕の部屋で鶏のスキ焼で送別の宴をはった。彼はマンダレー街道をトラックに乗って疾走中、敵機の機銃掃射にあい

にて開業)が着任し、第二病棟主任となったので、僕は第二病棟付兼手術室主任となった。しかし、このころになるとアメーバ赤痢による肝臓膿瘍が殖えてきた。それで「外科的アメーバ」の特別病室をつくることとなり、その主任も兼務することとなった。アメーバ赤痢による肝臓膿瘍は肝臓の中に膿を持ち、ひどいものになるとヘソの辺まで肝臓が腫れる。これは手術をしないと治らないが、その手術の方法である。いきなりお腹を開けて肝臓に切開を加えると、膿がお腹の中にひろがり、必ず腹膜炎を起こす。そこで僕はまずお腹を開けて腹膜と肝臓とを縫い付け、三日後癒着を待って肝臓に切開を加え膿を出す方法を考えた。上の方にある膿瘍は、肋骨切除をしてから行なった。これによって八〇%救命できたが、膿は多いのになると三リットルも出た。しかし、結局は塩酸エメチンを使わなければ完治しなかった。感心したのはこのエメチンである。シンガポールで押収した英国のものだが、錠剤でこれを蒸溜水に溶かすとすぐ注射が出来るようになっていた。さすがはイギリスの南方政策である。

韓国人の一般員がやはり肝臓膿瘍で手術して治り、後日彼が印度洋の沖で獲ったという大きな魚の干物を持って来てくれたのは嬉しかった。病棟のみんなで舌つづみを打った。この肝臓膿瘍の術前の普通写真(読売新聞跡部君の好意により撮影)や検査成績、X線写真等すべての記録は、終戦前の転進時に爆撃でふっとばされてしまったのは今もって残念である。

そうこうしているうちに、戦況はだんだん悪くなった。レイテ島で大勝したなどのデマが飛んだが、後で大負けであったことが判ったり、隣にある軍司令部が爆撃されたりして、昭和二十年の正月を

トラックもろとも断崖より転落、脊椎を骨折し、トングウの兵站病院に収容され、僕の病棟に転送されてきた。背中に大人の拳ぐらいの血腫を作っていたので、これを切開、絶対安静で入院をつづけさせた。マンダレー街道は一名靖国街道といわれた。真っ直ぐなコンクリート道路が果てしなく続いていて、必ず敵機の襲撃をうけて「靖国神社行き」になるといところから、その名が出たという。

五月に入るとインパール作戦に失敗し、続々と戦傷者が入ってきた。それこそ着のみ着のまま。鉄カブトも、軍帽も銃もなく、ポロポロの軍服に竹のツエをつき、やつとたどり着いた姿。玄関で安心のためか、息を引きとる兵隊もいた。今まで外科病棟、内科病棟と分かれ、一人々々ベッドであったのが、床上げ(五〇センチ位あげて板張りにする)をし、外科病棟にも内科患者を収容した。マリリア、アメーバ赤痢、栄養失調が主だった。僕の病棟も一時は六百名から収容したが、下士官一名、看護婦数名ではどうすることも出来ない。朝から晩まで患者の間を駆け回り、重症者から手当てをする。しかし、手当てのいかにもなく、一日に数名の死者が出た。その間に手術やら病床日誌の整理やらで、寝る暇がないとはこのことであつた。

現地召集が始まる

インパール作戦失敗後の混雑もだんだんおさまり、入院患者が減り、病室の方も一段落ついて、八月には再び外科、内科と区別されるようになった。そのころ軍医学校出身の山口少佐(現在伊豆大竹

迎えるとB29がラングーン上空を横行闊歩するようになった。

各戦線も敗退に敗退、ラングーンに駐在する地方人も現地召集といって、そのまま召集されることになった。跡部君が、自分も召集されるだろうと、僕のところ相談にきたので、脊椎骨折ということで再入院させた。かわいそうなのは石神君であつた。この人は読売新聞のビルマ新聞主任であつたが、現地召集された。入隊にはミソラドンの飛行場まで送って行ったが、遂に行方不明となった。彼の冥福を祈る。

蘭部隊という防衛部隊を編成するから、患者の中で働ける元気な者を出せ、という命令がきた。一人も出さないわけにも行かないので、二、三人に行ってもらった。その人たちには、申しわけのないことをしたといつも思っている。無事復員していただければ、と祈ってやまない。

スタコラ逃げる軍医部

三月になると、ラングーンは「死の都」のようになった。軍司令部も、軍医部も、参謀も、全部タイの方に逃げてしまった。残っているのは我々の兵站病院と、貨物廠の一部と高射砲だけとなった。軍医部などはひどいもので、ふだんは威張っているが、こんなときには患者への指示、跡始末などはおぼろかし、自分達だけスタコラ逃げてしまうのだから、全くお話にならない。当時我々の兵站病院は三千の患者を抱えていたが、「ビル看」と称する現地看護婦も、いつの間にか姿を消してしまった。

戦況はだんだん悪くなり、敵のM4戦車はすでにペグー（寢釈迦で有名）の近くまでできていという噂だ。ペグーは鉄道の分岐点で、ラングーンを出発点とした鉄道はここで一方はマンダレーの方へ、一方はモルメンの方へ行く。ここを制圧されるとビルマの首都ラングーンはクビを締められるようなものだ。二十年四月十二日ごろと記憶するが、歩ける患者と日赤看護婦をトラックで、ペグーを経てモルメンに後送した。丁度このころ、懇意にしていた通信隊の真崎大尉が、これから転進するから僕の軍用行李を先に持って行ってやろうと訪ねてくれた。それは有難うと二個お願いした。これにはアマーバ赤痢のレポートと、ビルマ人からもった象牙や病室に飾ってあった従軍画家のバステル画等が入っていた。

我々残された者は毎日不安の日を送っていたが、たまたま四月二十五日午後、以前僕のところに入院していた停泊場司令部の上等兵が、訪ねてきて「軍医殿タイへ行きますが、何か買物はありませんか」という。

戦況の良いときなら「ではビールと皮製品を」とでもいうところだが、

「おいおい、今は買物どころではないぞ。ときに停泊場には船はあるか」

「沢山ありますよ」

ということで、船で逃げたらどうかと発着係（患者の入退院などをする係）の井上中尉に話をした。

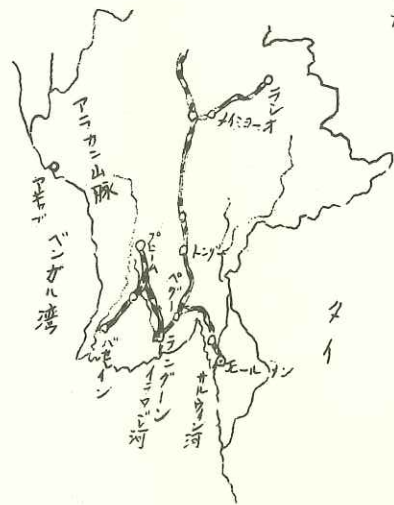
「じゃ君、隊長（清野病院長）のところへ行ってみて話してくれ」

「いや、これは君の係だから君から話してくれ」

ではということになり、彼から隊長に進言した。その日隊長は直

ちに彼と同道、停泊場司令部に行き交渉、三隻の船を入手できた。翌二十六日直ちに転進だ。トラックに患者を分乗、ラングーン港に向かう。ラングーン市内はすでに死の街最後の様相を呈していた。道々はビルマ人と印度人の物質の奪い合いで殺伐たるものだ。

ラングーン埠頭に着けば、出港は明日とのこと。一晚ここに野営することとなる。夕刻この停泊場司令部勤務の水船軍曹「この人も僕の病棟に入院したことがある」が訪ねてきて「軍医殿、埠頭の倉庫に毛布だらうが軍服だらうが靴下だらうが何でもありません。取っていらっしゃい」という。当番の岩城上等兵（熊本出身）ほか数名と、彼の案内で倉庫に行くところあるわあるわ何でもある。山積みとなっている。僕が少尉になったとき軍服が無く、見習士官の服に肩章だけ少尉のつけたことを思い出し、感慨無量のものがあつた。この倉庫も、やがて印度人やビルマ人の略奪の修羅場と化してしまふだらうと思つた。



二十七日早朝出帆、イラワジ河をくだる。翌朝モルメンに着くと同時に敵機の機銃掃射を浴びた。勇敢な船舶隊の応戦で敵機を撃退し、宿舎につく。

前日ラングーンを出た同仁会の船が、途中で機関砲攻撃をうけ、負傷者が出たのでこれを収容、第一〇三兵站病院に護送の命をうける。直ちにモルメン埠頭に行くと、負傷されたのは何と慶応大学教授、前田和郎先生だ。左鎖骨部機関砲弾破片創。応急手当をして兵站病院に送る。その帰途通信隊の真崎大尉に会い、僕の将校行李が途中でふっとばされたことを知る。僕の身代りだらうと話して別れた。

翌二十九日は天長節（天皇誕生日）だ。日がいからこれから前線の患者の収容に行くという。マルタバンを渡ったところでぼつたり跡部君と瀬戸口軍曹「下顎骨骨膜炎で僕の病棟に入院中先発隊として陸路後送した患者」に会う。

「軍医殿 これからどこへ行かれるのですか」

「前線の患者収容の命令で行くのだ」

「これから先には誰もいませんよ」

「しかし命令じゃ仕方がないよ」

彼等はペグーで敵機の爆撃にあい、着のみ着のまま、とほとぼモルメンに向かう途中で、ビルマ独立軍「日本軍が養成した軍隊」の反乱があり、散々な目にあい、ほうほうの体で逃げてきたのと。所持していた乾麵包を与え、再会を約して別れる。

その夕方、タトンという町に着く。タトンは静かな落ち着いた街だ。民家を接收して治療部を開設、前線からの患者収容に当たる。昼間は敵機の爆撃があるので、山に退避していた。

あるとき山の民家を訪れると、たまたま我々が接收した家の主人がいた。主人は我々にお茶をご馳走してくれたので、しばらくそこに休んでいると、薄暗い奥の方で何かうごめくものがある。よく見るとレプラ（癩）ではないか。あれは誰かと聞くと弟だという。ほうほうの体でそこを逃げだした。

タトンはドリアンのあるところ。いたるところにドリアンのある林があり、その林の中に、日本のスイカ畑のように小屋を造って、番人がはいつている。ドリアンが熟してドスンと落ちるとさっとそれを取り、朝になるとカゴに担いで売りに行く。糞臭が強いので、とても我々には取っつけないが、思い切つて一つ食べると後は病みつきとなる。ニンニクとクリームを混ぜたような味で、食べつけない「女房を質においてもドリアンを食う」といわれるのもウソではないようだ。

ラングーンの治療部主任時代、手術室勤務の猪隈軍曹（熊本県上益城郡七滝村出身）が内地帰還の際、記念にとシンガポールの病院で押収したという真つ白で、両端に赤、黄、緑、青の五色の鮮やかな線のあるきれいな毛布を贈られたが、この毛布をいつも当番の岩木上等兵が担いで持っていた。

「軍医殿、どうもこの毛布を持って歩くと、敵機に見付かるよう仕方がありません」

「そうだな、軍用毛布の方がいいか。それじゃこれ売ってドリアンでも食うか」

「そうしましょら」

この毛布は三千ルーピー（三千円位）で売れた。全部ドリアンに替え、二人で毎日たらふく食べた。ドリアンが無くなると、指に残っ

たその臭いがかぐほど、ドリアンは人を中毒的にする。

「ビルマの果物類」 ドリアン

果皮に刺(いばち)のようなトゲが密生している。大きさは中位のザボンほど。味はニンニクにクリームを混ぜたよう。

ジャック・フート

一名カノンともいう。ジャックの長靴という意味であろうか。長さ五十〜六十センチ。太さは直径二十センチもあり、釣鐘のようで、果皮には大仏の頭のような凸々があり、木の幹から直接ぶらさがっている。味はバターに砂糖を混ぜたよう。採ってもすぐは食べられない。芯(しん)のところは太い棒を打ち込み、一週間位縁の下に入れて熟するのを待って食べる。種子は栗の実大で焼いて食べると栗のようだが栗より甘味がない。

マンゴー

腎臓のような形で、大きさはそれよりやや小さい。果肉は熟すと黄色で松ヤニくさい。種子には多数の毛のような繊維がついていて、これが歯に引っかかって食べにくい。しかしなかなか甘美、どこの庭先にも見受ける。

マンゴスチン

李桃より少し大きいくらい。果皮はナスの皮の色と同じで紫色。果肉は白く、カルピスのようで清楚な味である。

よってヒモをつくり、リヤカーのホークを焼いて釣針にし、ウドン粉をねってダンゴ状の餌とし、これを放り投げてやった。

「オーイ、誰か来てくれ」

と云う声に、駆けつけてみると、竹竿は折れんばかり、彼は悪戦苦闘している。みんなで引き上げると、一メートルもある鯉ではないか。ウロコは大きな松の木の肌のようにだ。それからは竹竿を使わないで、糸のまま投げ、魚がかかると、みなでわっしょいわっしょいと糸を肩に掛けて引き上げた。大きいのは一メートル二、三十センチもあり、支那料理の五柳魚まがい油であげて毎日舌ツツミだ。これは食糧がなかったから、おいしかったわけで、味は大まかで、揚げ物にでもしないと食べられたものではない。

ここには鉄九(千葉の鉄道九連隊)の分遣隊がおり、守屋という准尉が隊長で駐留していた。滞在するうちその守屋准尉とも懇意になり、一タクジャックのスキヤキをご馳走になる。クジャクの肉は鶏の肉よりあっさりしてなかなか美味。夏目漱石ではないが、クジャクの舌は食べなかった。ビルマにはクジャクが大変多くいるようで、国旗もクジャクが表現されている。また、このアパロン辺は鉄九がタイとビルマ間のタイメン鉄道を敷くのに敵の捕虜を沢山使用し、しかも、そのときコレラが流行したので、白骨累々であったともいわれていた。

ここで始めて二口顎虫を見た。一人の兵隊が、胸を腫らしてきたので切開してみると、雌のノミぐらゐの大きさの寄生虫を見つけた。これが二口顎虫であった。この虫がいわゆるラングーン腫れを起すもので、このラングーン腫れは、きょう額(ヒタイ)が腫れたかと思うと、明日はアゴが腫れたり、陰囊が腫れたりする。筋肉

オジャリ

お葬式のときの蓮の花のお菓子のよう。色はやや濃い緑色。ただ甘い味。

その他

パイア、パイナップル、バナナ、スイカなど……

バナナは十数種ある。やはり台湾バナナと同じ種類のが一番美味。モルメンバナナと称するのは果皮が紫色。ゴールドンバナナといわれるものは、台湾バナナより小さく、丸みがあり、味はクリームのような。そのほか三角形の長さ十センチぐらゐのパサパサで食べられないものや、モンキーバナナと称する黒い種子のあるもの、また現地人が天ぷらにして食べていた果肉の余りないバナナもある。

二口顎虫を見る

タトンから転進、印緬国境のアパロンに、山から竹を切って来て柱とし、チークの葉で屋根を葺いて病院を設営する。

さて、病院を開設したものの、患者はモルメンからタイのパンボンに直接送られるので、暇で暇で仕方がない。囲碁、将棋などをやっていたが、食糧もだんだん不足するので、魚でも獲ろうということになり、幅百メートルもある前の川で釣をする。普通の糸ではみな切られてしまう。きつと雷魚か何かだろうということで、同僚の一人(多分松本軍医だったと記憶する)が、木綿糸を三十二本に

を縫って移動するのが特徴といわれ、日本人はサシミを食べつけているので、雷魚のサシミなどから寄生されるものといわれていた。

生地獄の患者輸送

このころ、病院長の清野大佐は、タイの軍医部に転属し、小原少佐(仮名)が病院長代理となった。彼はアミーバ赤痢にかかっていた、いつも下痢をしていた。口がいやしく、食べるなどいっても何でも食べてしまうので、遂に終戦を迎えずして、ビルマの土となられたのはお気の毒であった。

七月中旬、この小原少佐が、僕に「この戦況の悪いときですまぬが、タイのバンドンの一三三兵站病院へ患者の輸送をたのむ」といわれた。タイは大変面白いところだし、友好的で物資も豊富だ、と聞かされていたので、一度は行ってみたいと思っていた。が、この状況が悪化しては、そうもいかないから有難迷惑な話。とはいえ、これも軍務、百五十名ばかりの患者輸送にあたった。

栄養失調、マラリア、アミーバ赤痢、いづれも重症患者ばかり。アミーバ赤痢の患者などは、汚ない話だが、汽車の窓から尻を出して下痢のたれ流し。行儀のよい患者は、汽車が停まると降りて駅の便所へ行くが、発車の合図がないので置いてきぼり。

車中で息を引きとる者もいた。このような人は、小指を切りとって遺骨とし、遺体は駅にたのんで埋葬してもらった。飯盒(はんごう)も水筒も持たない兵隊がいて「軍医殿、あの兵隊が死んだら、彼の飯盒をください」といつてくる。まったく生地獄とはこのこと

であろう。

パンドンに降りて、一三三兵站病院に行く途中では、横道からひょいと出てきたタイ人が、兵の担いでいる銃をスッと持って行く。兵は振り向きもしない。ただフワフワと歩いて行くだけ。まったく無抵抗。無抵抗というより気力も意識もないといっている。僕達とかく患者は送り届けた。しかし、こうした状況の中では、僕達の気持も動揺した。一緒に行った上村軍曹、当番の岩木上等兵と「このままタイの軍医部へでもずらからるか」などとも話し合った。しかし、それはできなかった。

「戦友のいるビルマに帰ろうや」と、ザボン数個を土産に、再びアパロンにとぼとぼと帰った。

この間に小原少佐が亡くなられていた。七月下旬と記憶するが、スマトラから渋谷大佐が病院長として転属されてきた。

降伏、軍刀の「引渡し式」

昭和二十年八月十五日、通信隊の兵隊が「日本軍はついに降伏した」との通信をキャッチ。我々に知らせてくれた。

「将校は皆殺しにされるだろう」

「いざとなったら山へ逃げこもうか」

勝手なことをいって、院内は騒然となったが、結局「なるようにしかならないよ。度胸をすえてようすをみよう」ということに落ち着いて。

この日、印度独立軍の将校が、鉄道事故で右大腿骨を骨折、兵を

つれて入院してきた。戦争の終わったことを話し、「君はどうするか」と聞くと「それでは逃げる」という。右下肢を副木固定してやると、兵に伴われて出て行った。恐らく小舟に乗って逃げたことだろう。

八月末、英軍司令部から、軍刀を引き取るから、その目録を提出せよ、といってきた。数日後アパロンの駅の近くの広場で「引渡し式」が行なわれた。我々が軍刀を捧げて渡すと、印度の将校が片手で受け取り、その傍で英国の将校が、ステッキ片手にこれを見ている。しゃくにさわるが仕方がない。

そのうちウエガレー（温泉地）に移動を命ぜられた。それ、腕に赤十字のマークをつけろ、やれ、機密書類は焼け、押収品は捨てろなどと大騒ぎ。赤十字の腕章などは、もうとうの昔に失くしてだれも持っていない。経理部が苦心してこれを作り、みなに渡ししてくれた。

ウエガレーに移ってから、英軍による入院患者のクビ実検が始まった。証人を連れてきて兵隊を庭に並べ、該当者は列外に出して連れ去った。このころから英軍による給与が始まった。缶詰のサーヂンが主で、煙草も時々支給された。しかし、支給の煙草ではとても足りない。現地人と布と煙草の葉とを交換し、陰干にして、それを紙で巻いて吸った。煙草巻の器械まで発明されたが、コンサイスの紙が一番よかった。なかには軍用紙幣ルビー（一円札）の価値がなくなったので、これで巻く者もいた。

死刑にされる心配もなくなり、仕事といえれば自隊患者の診療だったので、暇をもてあました。そこで朝から晩まで囲碁、将棋に明け暮れた。碁では牧中尉（高崎市出身）が三段とかで抜群に強く、僕

など井目（セイモク）に二十目コミ出してもかなわない。

マージャンもやった。ビルマの竹は肉が厚く、二センチもあるので、これでマージャン牌（パイ）をつくった。まず竹を牌の大きさに切り、グライNDERで平らにし、紙ヤスリで磨きをかける。それを彫るのだが、各種類四枚ずつ彫らせたなら、よってたかかってたちまち四、五組出来てしまった。ルールと役を紙に書いて張り出している手ほどき、しまいはマージャン大会までやるようになった。

川から魚を獲って食糧の補給もした。経理の相良少尉（大分県出身）から日本の蚊帳を出してもらい、これを川の下流に張り、上流から棒で、わっしょい、わっしょいと魚を追い込む。ほとんど毎日のようにやった。サヨリのような、口の長い魚が随分沢山とれ、意気揚々と宿舎に引きあげたものだ。

祖国の土を踏む

こうして帰還の日を待つうち、二十一年四月、ムドン（バーモの出生地）に集結命令が出た。ここへ着くと、軍医部に転属になった山口少佐がいて、僕に終戦処理のため軍医部にきてくれという。

「病院と一緒に帰れるならお手伝いしましょう」

という「必ずそうする」ということで軍医部へ転属になった。

七月上旬、帰還ということになり、米輸送船に乗船、日本に向かう。船中上官をなぐる光景などが、あちらこちらに見られ、本当に悲しい思いであった。

七月十八日、左手に九州の山々が見え、十九日大竹港に着く。そ

こで連合軍による所持品検査、頭からDDTをふりかけられ、発疹チフスの予防注射を受けたが、若い日本の医者が片手でブツリブツリ注射をするのには腹が立った。宿舎に行きひと休みすると、将校三千ルビー、下士官二千ルビー、兵隊千ルビーを日本円に換えてやると発表されたが、僕は戦地でもらった月給は飲み食い已全部使ってしまったので一文なし。しかし、当番の岩木上等兵は金を持っていたので、僕の名で三千元、岩木上等兵の名で一千元、計四千元を換えてもらった。宿舎に一泊、お互いに無事帰還を喜び、お互いに世話になったことを謝し、機会があったら東京にきてくれ、などと手を取り合い、二十日に僕は、東京までの切符一枚をもらって、東と西に別れた。

二十一日東京に着いた。終戦一年近くともなれば電車に乗っている人達も「兵隊さん、ご苦労さんでした」などと思ってくれる顔は一つも見当たらない。高田馬場につくと空襲でやられた地域を赤で塗った地図があった、田無もその中に入っている。母は?! 妻は?! 子供達は?! 病院は?! 心配しながら田無に着くと、駅前には爆撃でやられて見る影もない。これはダメだ、としばし足が進まず立ちすくむ。しかし、こうしていても仕方がないと裏の畑から恐る恐る我が家に入る。あった、あった、病院があった!!

母も妻も子供達も!!